

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 5 日現在

機関番号：32690

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520691

研究課題名（和文） 大正期日本の多角的多層的国際化に関する基礎的研究

研究課題名（英文） Fundamental study on the diversified and multilayered internationalization of Japan in the Taisho era

研究代表者

季武 嘉也 (SUETAKE YOSHIYA)

創価大学・文学部・教授

研究者番号：40179099

研究成果の概要（和文）：大正期は英・仏・独中心のそれまでの世界情勢が一変し、欧州自体が変化しただけでなく、米・ソ連・中国が台頭した。さらに、第一次世界大戦の勃発に象徴されるような急速なグローバル化が進展した。本研究は、このような世界の変化を見ようとして、どれだけの日本人が、どこに、何を視察するため海外渡航したのか、を考察した。この結果、幅広い層から幅広い分野で海外視察が行われ、その後の日本の形成に大きな意味を持ったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In the Taisho era, the world situation which used to be centered by the UK, France and Germany had changed completely not only because of the changes among the European nations, but also because of the rise of USA, Soviet and China. Moreover, shown as the outbreak of World War I, there was a rapid progress of globalization. This study investigated the specific number, destination and object of the Japanese who went overseas to see these changes in the world. As a result, it came to light that these inspections made by various people in various fields had great significance for the state formation of Japan in the following ages.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、日本史

キーワード：大正 第一次世界大戦 海外渡航 海外視察

1. 研究開始当初の背景

(1) グローバル化への対応

昨今、グローバル化が叫ばれて久しいが、第一次世界大戦が勃発した大正期も同じような状況にあった。それは二つの面で進行した。一つは、政治・経済面での国際関係に於いてである。大戦勃発当時、戦争があれほど

急速に世界中に拡大することを予測する者は少なかった。その理由は、各国の利害が複雑に、しかも強く関連しあっていることを理解する者がいなかったからである。二つ目は、より見えにくいものであるが、1918～1919年のスペイン風邪の世界的大流行に示されるように、度重なる技術革新の結果、人・物・

情報の移動が大量かつ迅速に行われるようになっていた。じつは、この二つの現象は以前から静かに進行していたため、人々はなかなか気付きにくく、大戦の勃発によって初めてそれを痛感した。すなわち、何らかの対応策をとる前に、世界はいつの間にか想像以上に狭くなっていたのである。この点は、現在のグローバル化現象にも近いものがある。

また、大正期は現在の国際社会の出発点として位置付けることもできる。大戦の結果、それまでの旧式の帝国主義外交をリードしてきた英・仏・独は現代型国家に向けて大きく変貌し、また、アメリカ資本主義の世界的展開、社会主義国ソ連の台頭、中国ナショナリズムの力強い高揚などが現れ、現代国際政治の枠組みがほぼ整った。また、人・物・情報の移動はその後にも強まり、現在の高度情報化社会へと向かうことになる。

以上のように、現在のグローバル化を歴史的に理解するには、第一次世界大戦頃の状況を理解する必要があると考えた。

(2)日本の「改造」思潮

さて、こうして世界情勢が大きく変貌し、かつ人・物・情報が荒波となって否応なしに日本にも押し寄せてきた。それは「第二の開国」とも呼べるような状況であった。これを受け、日本国内では「改造」が叫ばれた。「改造」とは、国家や社会の各分野で制度の根本的改革を進めようというものであった(季武嘉也編『大正社会と改造の潮流』吉川弘文館、2004)。しかし、この「改造」風潮は具体的なものというよりも多分にスローガン的であり、明確な実体を伴ったものではなかった。すなわち、世界の潮流に遅れまいとして焦慮しながらも、では一体何を改造すればよいのかという点になると、急に曖昧になってしまうのであった。

そこで、その具体性を学ぶために多くの日本人が海外に旅立った。周知のように、1853年のペリー来航以降、日本から開国進取の気性に富んだ若者が海外に飛び出し、世界情勢の認識に努めた。また、1871年には大型の政府代表団である岩倉使節団が渡航した。この後の日本は「文明開化」「殖産興業」に大きく舵を取っていくが、彼ら渡航者がこの意味で重要な役割を果たしたことはよく知られていよう。この点では、大正期も同じだったのである。ただし、幕末明治期については手塚晃・国立教育会館編『幕末明治海外渡航者総覧』(柏書房)をはじめ、詳細な史料集や研究が存在するのに対し、大正期に関してはほとんどない。しかし、大正期の渡航者たちも帰国後、大きな役割を果たしたことはある程度分かっている(一例であるが、1921年欧州出張中の若手陸軍将校岡村寧次・永田鉄山・小畑敏四郎がドイツのバーデン=バーデ

ンで会合し、軍の近代化と国家総動員体制の確立などの抜本的改革や、満蒙問題の解決を誓い合ったことは有名)。

とすれば、昭和から現在に至る日本を理解するためにも、大正期の海外渡航者の実態を明らかにする必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上記のような認識を前提に、大正期の日本人がどのような対応をとったのかを分析することにある。

幕末明治期においては、優秀な若者を選抜して長期間に亘り海外に留学させた。そして、帰国すると彼らの多くは日本国家の基礎を確立することに貢献した。しかし、日本の国際的位置の上昇や交通機関の発展など、幕末維新时期とは事情が大きく異なる大正期では、当然のことながら海外渡航の様相も異なる。しかも、前述のように残念ながら大正期の場合にはこれに関する研究は遅れている。そこで、本研究はまず基礎的な部分から進めなければならない。以下、具体的に列挙しよう。

(1)全体像の把握

どのような人たちが、どれだけの数で、どのような目的で、どこの地域に行ったのかを全体的に把握することである。前述のように、幕末明治期では少数の秀才たちが西欧を中心に国家形成に貢献すべく留学したのであるが、大正期の場合はどうであったのかを比較しながら検討する。大正期では海外渡航する人物が一部のエリートだけでなく、分野も様々であることが予想されるが、その概略的な傾向を把握することが第一歩である。

(2)報告書類の収集

その上で、帰国した人々が海外渡航から何を得たのかを知るために、彼らが帰国後に記した報告書類を収集することである。報告書類には様々な形態(公文書・雑誌記事・新聞記事・図書・未公刊日記・私的通信文等)がある。そのため、幅が広すぎてどこから手を付ければよいのか分かりにくいのが、兎に角出来る範囲で行うことにした。

(3)報告書類の分析

つぎの段階は、収集した報告書類を読んで分析し、彼らがいったい何に関心を示したのかを知ることである。彼らは当然、一定の問題関心を抱え、その解決のために海外に行ったのだから、彼らに関心を示したことには、解決のヒントが含まれていたはずである。したがって、彼らの示した関心を分析することで、当時の問題関心の有り様と、求めるモデル像を知ることができよう。

(4)渡航成果の分析

そして、彼らの渡航経験が、昭和期におけ

る彼らの活動にどのような影響を与えたかを知ることが最終的な目的となる。そこで、渡航→活動の具体的な因果関係を個別的に探る。このことによって、昭和の日本がどのように形成されたのかの一端を明らかにできよう。

3. 研究の方法

研究の方法は、上記の目的に則して実施することにした。

(1) 基礎的データと報告書類の収集

第一は史料収集である。統計的数字に関しては、前掲手塚晃氏らの研究成果や、各年『日本帝国統計年鑑』、旅券業務を担当する外務省の統計書(『旅券下付数及移民統計』・『海外渡航及在留本邦人統計』)、アジア歴史資料センターホームページ、各新聞紙等から複写、印刷して収集した。

報告書類は、今回は敢えて国内での史料収集に限定することにした。その理由は、第一に、国内だけでもいまだあまり知られていない史料が多数存在しており、それを収集することに全力を注ぐためであり、第二には海外を調査しようとすれば、それはそれでまた大きな作業を要するため、その際には別のプロジェクトとした方がよいと考えたからである。

この方針から、公文書・雑誌・新聞・図書・日記・私的通信文を中心に収集した。そのために、専門的知識を有する研究者の意見を参考にしながら、彼らと共に網羅的体系的に全国調査を進めた。

(2) 史料のデータベース化

こうして収集した史料はデータベース化しつつある。ただし、予想通り網羅的体系的にすべて収集することが困難であったため、その全体像をいまだ明らかにできないのは残念である。

(3) 報告書類の分析

収集した報告書類を、専門的知識を有する研究者らと共に分析した。研究代表者が彼らと個別に会い、彼らの集めた史料について議論した。ここから、研究成果として公刊する論文の構想を得ることができた。

4. 研究成果

以上のような作業の結果、つぎのような研究成果を得た。

(1) 大正期海外渡航の全体的把握

これについては、下記の季武嘉也「大正期の海外渡航」(『近代日本研究』)にまとめた。特徴的なことを列挙すれば、以下の通りである。

① ビジネスマンの渡航先として米国が多くなった。これによって日本はますます国際経

済に組み込まれていった。

② 中国との関係であるが、一方では 21 カ条要求に象徴されるように摩擦を深めるのであるが、他方では日本人渡航者の増大となり、両国は複雑な利害をはらみつつ昭和期に入っていった。

③ 欧州渡航者は一時的に減少するが、再び増加する。その目的としてグローバルスタンダードの形成を促進するためにジュネーブ等へ行く場合などが目を惹いた。

④ 大正期の場合は、エリートではない人間が集団を組んで、視察を目的にして、複数の国を巡回するというケースが多くなったことが印象的であった。海外渡航が大衆化し、グローバル化が進展した状況がここから分かる。

⑤ 労働者の移民・渡航については、大正期に入ると米国移民が減少しロシアへの漁業労働者渡航が増加したが、それもロシア革命で減少した。

(2) 渡航報告書類の分析と論文の作成

個別の海外渡航を深く分析し、研究論文として公刊することであるが、現段階で得られた成果は以下の通りである。なお、この作業は他の海外渡航者を対象に、今後も継続していく予定である。

① 後藤新平の欧米外遊

第一次大戦直後、後藤は鶴見祐輔等若手官僚を引き連れ、欧米各国を巡遊した。その目的は、所謂計画経済を中心としたドイツ勃興の要因を探ることであった。この考え方は、昭和に入ると、担い手を変えながら継承されていった。具体的には下記の季武嘉也「『国際化』と『科学化』の始まりは大正時代にあり」(『中央公論』)を参照のこと。

② 市町村長たちの欧米視察

大戦直後に結成された全国町村長会は、日本でも自治を確立すべく、モデルとしての欧州を視察した。彼らは欧州の、自治思想に基づく教育、協同生産方式に深く共鳴した。昭和に入ると、彼らはこの実現をめざして活動することになる。これについては近々論文として発表するはずである。

③ 横田千之助のワシントン会議随席

原内閣法制局長官の横田はワシントン会議に随席したが、当時重要性を帯びていた日米関係について様々なことをその日記に記した。研究代表者季武はその日記を遺族から拝借し、将来論文にすると同時に、国立国会図書館憲政資料室で閲覧できるように準備を進めた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 季武嘉也、大正期の海外渡航、近代日本研究(慶應義塾福沢研究センター)、査読無、29巻、2013、105-123
- ② 季武嘉也、「国際化」と「科学化」の始まりは大正時代にあり、中央公論、査読無、127年、2012、130-142

6. 研究組織

(1) 研究代表者

季武 嘉也 (SUETAKE YOSHIYA)

創価大学・文学部・教授

研究者番号：40179099

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：